第 2016-50 号

恵みと真理のニュース

2016 年 12 月の三次　恵みと真理教会
韓国 京畿道 安養市 萬安区 安養路 193 / ☎82-31-443-3731 / www.gntc.net

[証]　神様は私の力であり、私の生きる理由と目的です

"恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。"　" わたしの目にあなたは価高く、貴く／わたしはあなたを愛し／あなたの身代わりとして人を与え／国々をあなたの魂の代わりとする。それから、わたしを呼ぶがよい。"　"苦難の日、わたしはお前を救おう。そのことによって／お前はわたしの栄光を輝かすであろう。"

私の母は結婚以後、大変な家庭生活をする中で恵みと真理教会を通うようになって真にイエス様を受け入れ固い信仰を持つようになりました。私も母に導かれ主日礼拝と区域礼拝、児童区域礼拝など参席しました。すると、不信者だった父と仏教を信じた祖母が母を迫害しました。私たちはひそかに礼拝を捧げるため教会に行って家族の救いと平和のため熱心に祈って、特にお盆は偶像崇拝をしないように切に祈りました。ますます父の迫害が酷くなって思春期になって礼拝をおろそかにしました。家庭不和が続ける状況で子供の時から思っていた夢を辞めるしかないのかと喪失感と新しい高校に転校して寂しさが重なって18歳に憂鬱症が来ました。たまには神様の存在を疑って，“なぜ生きるのか”と同じ問題で良く悩むようになりました。しかし、神様の助けでキリスト教大学に進学しました。その間、母の状況は良くなりましたが、私の心は神様から離れて学校でもチャペルの時間とキリスト教の授業に居眠りしました。友達と交わって世を楽しました。当然、学校の成績も悪くなりました。そうする中でもたまには教会だけは行くべきだと思ったりしました。キリスト教に関連する授業で教会に行って説教を聴いてレポートを提出をしなければならないので母をついて水曜礼拝に行きました。そして、その日牧師の説教を聴いて真に悔い改めて世に向かっていた私の心を神様に戻りました。涙を流しながら祈りをする中で主だけ生きる理由であることを悟りました。母の長い祈りの実りであり神様の救いの恵みでした。ハレルヤ！

その後、"私を呼んでくださり救ってくださった主のため私は何をするべきか。" 深く考えて青年部の礼拝と集いに熱心に参席して教会学校の幼稚部で奉仕しました。初めは弱い信仰で礼拝のため奉仕をして、難しいことが多かったですが、私を呼んで恵みをくださる神様だけを見るとすぐ適応することが出来て世では経験しなかった喜びを感じました。　神様が恵みをくださってよく引けなかったピアノを短期間に習って伴奏もすることが出来ました。そのように神様が慈しみを与えてくださり多くの奇跡を見せてくださって私の信仰が強くなりました。主がくださる喜びで充満になって世で好きだったのをやめることが出来ました。主が知恵をくださって学校でも奨学金を受けました。感謝の心で教会の全ての礼拝に参席して青年部でも賛美団員と区域長の職分を感謝し従順して奉仕しました。また、神様の恵みで海外の宣教奉仕活動に参よすることでした。 熱心に礼拝中心、教会中心の生活をするとサタンの妨げも酷くなりました。就職する前、大学で勤務しながら、wccに参与して支援する大学であることを知ってすぐやめました。その後、礼拝生活をする会社に就職するのを目標をして努力しました。しかし、やさしくなかったです。まわりでは適当に妥協して職場生活をするように勧めました。願っていた所に就職が出来なくて自尊感が低くなった時に神様の御言葉と聖霊で慰めてくださり摂理してくださって、結局礼拝生活と時間や条件や人間関係など面で期待できるところで就職できました。

職場生活をする中で新しく赴任した理事長が伝統の教団から異端教団に判定された教会に通う方なので私は紛らしいでした。すぐ教役者に相談して異端と遠くなって純粋な信仰を守ることが出来ました。神様は危機を機会に変えて強い信仰の剣を持つようになりました。もっと熱心に御言葉を黙想と当会長の牧師が伝えてくださる説教を聴いてその方をかわいそうに思って神様と聖書に対する正しい信仰と知識を持つように毎日祈りました。海外宣教を準備するときにまわりの人々が職場生活をするのに大変ではないのかと話したが、 "会社を辞めても神様の国と義をまず求める。" 信仰で神様の助けを願いながら祈りました。その心を見てくださり神様が閉まっていった環境の扉を開いてくださいました。

新入社員が個人事で冬の1週間も休暇に行くのは会社ではなかったことです。また、宣教に行くため様々な準備がたくさんありましたが、神様が時によって助けてくださいました。海外宣教の6日目になった夜、母から喜ばしい知らせが来ました。"スヨン！お父さんが教会に行くと言った。お父さんが、必ず教会に行くように祈ってね！。しましたが、しかし、帰国して決曜祈り会に参席して家に帰ってくると父が大きく怒りました。神様の時になったと思ったですが、以前より苦しかったです。海外に行っても大胆に熱情を持って伝道しましたが、愛する家族が主の所に戻るように伝道できない弱さと切なさで神様にもっと神様に祈りました。すると、聖霊様が大きい勇気を与えてくださって父と話をすることが出来ました。お父さん、イエス様はお父さんを本当に愛しいます。待っています。一緒に教会に行きましょうよ。と大胆に話しました。すぐ成果はなかったですが父の前で大きく説得したことで神様に感謝しました。

そのことがあった後、肉体的、精神的に迫害が酷くあげく、母と私は家から追い出されました。しかし、落胆にならなかったです。知り合いの区域長の家で過ごす間、希望の御言葉を強く信じて、感謝する心の中で他の迫害を受けている家庭のため区域長のように私達も助けてあげようと思いました。父が家の暗証番号も変えました。しかし、神様は知恵を与えてくださって、自動カギをあらかじめ用意しておいたので父が家にいない時、家に入りました。そして、帰って来た父に相変わらず愛し家庭を絶対に離れないと話しました。 私には担えられないほど苦しかったですが、大変になるほど礼拝して奉仕する生活に集中しました。ある日は水曜日にとても苦しくて礼拝が終わって大きい聖殿で一人残って大きい声で泣いて神様に祈りました。神様に委ねて聖霊に充満になって出退勤するときに人々に福音を伝えました。母も聖霊を与えてくださって新しい力を受けて以前よりもっと人々を伝道しました。不信者だった祖母も母が心を尽くして主の愛を伝えたので水曜礼拝の時に決信しました。教区と区域の多くの方々が祈ってくださり、神様の恵みで今は安全に家で過ごしています。また、いつサタンが父を通して私たちを攻撃するかわからないですが、神様が力と助けになるので恐れません。

家庭福音化のため祈るときに神様は私に希望を与えてくださいます。金曜聖歌隊で母はソプラノ、父はテナー、弟はベースで主を賛美する姿と家族が共に朝8時に礼拝を捧げて奉仕をし伝道する姿、家庭礼拝をして家では讃美歌が響くのを描かれます。神様は知っておられます。神様は家庭福音化の切ない祈りに答えてくださるのを信じます。今私はドンタン聖殿で金曜礼拝の聖歌隊員として奉仕してアンヤン聖殿の青年奉仕宣教会で国外宣教部の部長の職分を受けて仕えています。来年2月に予定しているマレイシア宣教奉仕活動のため熱心に祈って準備しています。豊かな実りを結んで神様に栄光を捧げる宣教使役になるように祈りお願いします。日が経つほど魂を愛する心を与えて奉仕する喜びがあふれるようにしてくださる神様を賛美します。日々の暮らし、主の深くて豊かな愛を感じ体験するように導いてくださる神様に感謝します。天国に行く日まで神様が表す大きい愛と恵みを考えると今も心がわくわくします。神様！私の心を尽くして愛します。

[信仰コラム]　私達が堅持すべきの信仰姿勢

"...まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。..." (マタイによる福音書 6:24～34)

本文にはイエス様の説教が記録されています。私達が常に堅持すべきの信仰姿勢の三つを力説なさいました。

第一は、神様だけに仕えるよう力説なさいました。

神様と財物を共に仕えることができないということを端的に見せてくれる実話が聖書にあります。（マタイによる福音書 19:16～22）財物と名声、権勢を捨ててもとこしえの命を得ようとする人がいる反面、とこしえの命を諦めてもこの世のことを得ようとする人がいます。金持ちの青年はとこしえの命を得ることが人生の重大課題と知っており、これを渇望したのは間違いありません。しかし、実際に自分の財物を全て諦めると考えたらとこしえの命より財物の方を選んでしまいました。とこしえの命を得るためには私達が所有した財物を全て処分しなければならないということではありません。とこしえの命に最大の比重を置くべきだというお言葉です。とこしえの命は全てのことを諦めても得るべきの価値があることであります。

第二は、思い煩ってはならないと力説なさいました。

思い煩わない理由としてイエス様が空中の鳥と野の花を例にあげてお離しなさいました。食べて、着る問題で思い煩ってはならないと言われました。これは単純に食べて、着る問題に局限するお言葉ではありません。人間の生活を総網羅することでありあます。神様が空中の鳥と野の花より聖徒達を貴重に扱うということは当たり前な事実です。ならば空中に飛ぶ鳥と野草を治める神様が神様の子供の面倒をみてくださらないはずがありません。

イエス様のお言葉は次のように続きます。"...あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである、だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。"（マタイによる福音書 6:30～32、34）。神様は私達に必要なものが何であるか全てご存じであるので私達は何事をしなくても良いという意味で言われたのではありません。イエス様が禁止なさることは未来に対する賢しい考えではなく未来に対する心配であります。後日に対する計画と準備は必要です。しかし、思い煩わずに一日一日を最善を尽くして生きていくように言われたのです。私達に何事を発生しても決して、私達が耐えることのできないことは何一つも起らないと聖書に記録されています。（コリントの信徒への手紙一 10:13）

第三は、まず神様の国と神様の義を求めるべきだと力説なさいました。

全てのことに順位を正しく定めるべきです。まずにする事と後にする事を区分しなければなりません。神様の国を求めなさいというお言葉は主の統治を全的に受け入れなさいという意味です。神様の義を求めなさいというお言葉は全的に神様の恵みに依存し、ひたすら信仰で生活すべきだという意味であります。言い替えれば、まず神様の国と神様の義を求めなさいというお言葉は神様の命令に従って、神様の恵みと言約を信頼することを優先にしなさいというお言葉です。そうすると全てのことを添えて与えてくださると言われました。仮に、私達が持った能力と所有が少なくても重要なことは神様がその上に加えてくださるかいなかという点です。

モーセは 80 歳に自分が話した通りに口が鈍くて吃って持ったことは杖だけでした。しかし、神様が加えてくださったら彼の口から出る一言、一言にエジプト全体が焦土化されました。モーセが杖を出すと奇異な能力が現れました。ファラオが降参しました。数多くの群衆が雲集した広野である子供が昼飯で持ってきた大麦のパン五つ、魚二匹をイエス様が取られ天を仰いで祝福祈りをなさった後に与えたら五千人が十分に食べて残ったのが十二のかごいにいっぱいになりました。重要なのは神様が加えるか加えないかにかかっております。

皆さんは、イエス様が力説なさった三つの信仰的姿勢を常に堅持してください。神様だけに仕えてください。思い煩わないでください。まず神様の国と神様の義を求めてください。そうして添えて与えてくださる神様の恵みを享受するように祝福します。

「チョヨンモク牧師先生の信仰コラム‘緑の牧場、清い川’本の語り中」

祈る時と行動する時

恵みと真理教会 **チョヨンモク** 牧師

神様に祈る理由が何ですか? という質問に対する答を四つの種類で整理すればこのようです。第一、神様と交わるためであるからです。 第二、神様の御旨を尋ねるためであるからです。第三、神様の助けを請ずるためであるからです。第四、前の三種類の理由の土台になることで神様が私たちに祈りなさいと言ったし祈れば聴くと約束したからです。 祈らない聖徒はないです。 しかし祈ることに対する信者の態度や見解がすべて同じではないです。 祈る時間にむしろ熱心に働かなければならないと主張する信者がいるかと言えば、処理しなければならないことが大きくて多いほど祈るのにつくさなければならないと主張する人がいます。
今日はこのような二つの主張に対して聖書がどのように返事しているかをよく見ます。

第一は、私たちが祈祷の以外には別にすることがない場合をよく見ます。

予言者エレミヤが活動した時代にユダヤは暗黒期でした。 偶像崇拝と道徳的堕落と社会的不正腐敗がはびこりました。 そしてエレミヤは堕落した民に神様の震怒と審判を警告して悔改を促しました。 彼は敬虔な信仰と特別な愛国心の持ち主として同族を愛する熱情に捕らわれた中に予言者の使役を遂行して行きました。しかし悲しくもユダヤ民は長期間濡れていた堕落の道で振り返えなかったです。 むしろエレミヤはすべての地域、各界各層の人から逼迫を受けました。 またエレミヤの脅迫的なメッセージに激怒した王の命令でエレミヤは逮捕して監視の庭に閉じこめられてしまいました。 今こそ予言者が民に出て活動しなければならない時なのにこんなに閉じこめられていたら息苦しいこと言い尽くせなかったです。 “神様、私が出て叫ばなければならないはずなのにこんなに監視の庭に閉じこめられていてなす　すべがないからこれをどうしますか?” とエレミヤが叫ぶと神様がおっしゃいました。 “地を造られた主、それを形造って堅く立たせられた主、その名を主と名のっておられる者がこう仰せられる　わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。”(エレミヤ書 33:2,3). 私たちの処した状況がお手上げだと思われる時に気落ちしてはいけないです。 聖徒にはなすすべがないというないです。 祈ることができるからです。 活動が不可能な時は祈祷ばかりしなさいというのです。 そんなにすれば神様が働きます

二番目は、祈る一方　行動しなければならない場合をよく見ます。

エジプトから解放されたイスラエル子孫がモーセの導きの下で神様が彼らのご先祖に約束した乳と蜂蜜が流れるガナアン地を向けて出発しました。 神様がモーセにイスラエル子孫の行進する方向を替えるように指示しました。 イスラエル子孫が今まで上がった方向を急に振り返えて南東方向に進行させせました。 彼らはこれ以上進行することができない紅海の海辺へ登るようになりました。 モーセは神様の指示のどおりイスラエル子孫をその海辺に陣を張らせました。 神様は自分がどんな案を持っているのかをおっしゃってくださいました。 そのお言葉の要旨はこのようです。エジプト王がまっすぐに走って行ってイスラエル子孫が道を誤って荒野で迷っていることに誤った判断すると言いました。 そしてまっすぐに行ってイスラエル子孫を捕らえるために軍隊を導いて追撃すると言いました。 しかし神様が権能を現わして光栄を得るようになると言いました。 神様が自分が行う事を詳しくあらかじめ知らせてくださったのにイスラエル民はそのお言葉を念頭に留めおかなかったです。
神様のお言葉のようにイスラエル子孫が道に迷って荒野に閉じこめられたところなったという報告をきいたすぐにその臣下の心が変わりました。 彼らはイスラエル民を捕らえるために特別に選発された戦車 600 台と馬兵と歩兵を導いて追撃しました。 紅海の海辺で帳幕を張って休息したイスラエル民はエジプトの戦車と馬兵と軍隊が駆けて来るのが分かるようになりました。 民は甚だしく恐ろしがってモーセを恨みました。 しかしモーセは荒てなかったです。彼は民にきっぱりと言いました
“モーセは民に言った、「あなたがたは恐れてはならない。かたく立って、主がきょう、あなたがたのためになされる救を見なさい。きょう、あなたがたはエジプトびとを見るが、もはや永久に、二度と彼らを見ないであろう。主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」。” モーセがこんな態度を取るようになった理由は神様が予告したお言葉を気に掛けたからでした。
その時神様がモーセにおっしゃるのを “主はモーセに言われた、「あなたは、なぜわたしにむかって叫ぶのか。イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。
あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい。”(出エジプト記,14:15,16) としました。 “モーセが手を海の上にさし伸べたので、主は夜もすがら強い東風をもって海を退かせ、海を陸地とされ、水は分かれた。イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行ったが、水は彼らの右と左に、かきとなった。エジプトびとは追ってきて、パロのすべての馬と戦車と騎兵とは、彼らのあとについて海の中にはいった。暁の更に、主は火と雲の柱のうちからエジプトびとの軍勢を見おろして、エジプトびとの軍勢を乱し、 その戦車の輪をきしらせて、進むのに重くされたので、エジプトびとは言った、「われわれはイスラエルを離れて逃げよう。主が彼らのためにエジプトびとと戦う」。そのとき主はモーセに言われた、「あなたの手を海の上にさし伸べて、水をエジプトびとと、その戦車と騎兵との上に流れ返らせなさい」。 モーセが手を海の上にさし伸べると、夜明けになって海はいつもの流れに返り、エジプトびとはこれにむかって逃げたが、主はエジプトびとを海の中に投げ込まれた。
水は流れ返り、イスラエルのあとを追って海にはいった戦車と騎兵およびパロのすべての軍勢をおおい、ひとりも残らなかった。 軍隊は滅絶されてしまいました。
ここで見逃してはいけない重要な教訓があります。 祈る時と行動する時に関する教訓です。モーセは恐ろしさに捕らわれて叫ぶイスラエル民と疾風怒涛のように駆けて来るエジプトの戦車と馬兵を見ながら神様に叫んで祈りました。その時神様がモーセにおっしゃるのを “主はモーセに言われた、「あなたは、なぜわたしにむかって叫ぶのか。イスラエルの人々に語って彼らを進み行かせなさい。あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい。”(出エジプト記 14:15,16) としました。 今は祈っている時ではなく行動する時とおっしゃったのです。 杖を取って手を突き出す行動さえすれば次の仕事は神様がなさる仕事でした。
他の例をよく見ます。
イスラエル民が偶像崇拝するので主前 586 年バビロン帝国の侵略を受けて国が亡びました。民がとりこになってバビロンで引かれて行きました。 歳月が経ってバビロン帝国も主前 538 年にメデとペルシアの征服者に移りました。ペルシアのアハスヘ王の時にあった事です。ユダや人であるエステルが王后になりました。エステルは幼い時に親を失っていとこお兄様モルドゲによって養育されました。 エステルはモルドゲの駄目押しを受けて自分がユダや人を明らかにしなかったです。 エステルが王后に揀択される慶事がある 4 年後モルドゲとユダ民族が滅絶危機に処するようになりました。アハスヘ王の信任を受けたハマンは宮廷門にある王の臣下にとって自分におじぎをさせたがモルドゲがハマンにおじぎをしなかったです。ハマンは不快な心を抑制することができなかったです。 ハマンはモルドゲがユダや人であることが分かってモルドゲだけ殺すであるのではなくすべてのユダや人を滅絶させることに決心しました。 ハマンがアハスヘ王にユダ民族を讒訴したし王がその話を受け入れてユダや人を滅絶させなさいという命令を下しました。 ユダや人を所滅しなさいというアハスヘ王の調書がスサン都城を含めてペルシア帝国各所に伝達しました。
モルドゲとユダや人は禁食しながら大声痛哭しました。 そしてモルドゲは王后エステルにユダや人を所滅を指示した調書草本を提示しながら王后が王にさらにはユダ民族のために訴えるようにお願いしました。 エステルは大きい衝撃を受けたが自分の現在の立場としては王に進むことができないという立場を伝えました。しかしモルドゲの回答は非常に断固としていました。 “ユダ民族滅絶の日が決まった今お手上げで死ぬ時が来るように待ってはいけない。エステルが王妃の席に座るようになったことはこの時のためではないか。 神様が自分に与えられた責任と使命を忘れれば神様は他人を使うでしょう。” という話として会報しました。エステルがモルドゲに回答しました。 “あなたは行ってスサンにあるユダや人をすべて集めて私のために禁食するが昼も夜も三日間を食べなくて飲まない。 私も私の侍女に連れて禁食した後に規例を破って王に行くから死ねば死ぬである。” そして結局ユダ民族滅絶を免れるようになったし返ってハマン一族が滅絶にあいました。 もしモルドゲとエステルが祈祷ばかりしていたら民族滅絶を免れることができなかったはずです。 祈る時に祈って行動する時に行動しなければならないという歴史的な教訓がここにあります。

聖徒の皆さんは祈る時と行動する時を分別するように願いします。